

聞名仏教

第 147 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 12 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

疑えぬ信

佐々木蓮磨

一般によく「信じられぬ」「疑いがはれぬ」とコボしますが、それは大変な間違いであると思いません。私は真宗の信心というものはむづかしいどころか、易いも易いも信ぜずにはおられないいわれであると思いません。なぜかといえば、真実を信ずる(信)だからです。

弁当持ちでお寺参りをしても、信はえられないでしょう。「昼は明るい、夜は暗い」ということを信ずるのはむづかしいでしょうか。「冬は寒い、夏は暑い」ということを、疑う人があるでしょうか。おそらく一人として、疑う人はありません。

のであります。よく聞いてみると、われわれの生活そのものは、全く他力の中に摂められていくのです。どうタノム、どうスガルなど、考える必要は全然ありません。現在の生活は何物によって保たれているか、ということ明らかに知らせてもらえば、それでのいのであります。

ります。自力をすてるのは、今まで自力というものがあのように思い込んでいたところ、よく聞かせていただいてみると、自力というものの根柢は全くない、と知らせてもらうだけです。捨てることすらも、いらぬいわれであります。弥陀をタノムということも、よくよく聞いてみれば、現在の生活そのものが力がなくて大きな他力のなさしめによっていることが明らかになるのみで、別にタノム必要も、スガル用事もなくなるわけがあります。これが自力を捨てて、弥陀をタノムという真宗安心の要点でありましょう。

真実というものは、疑おうとしても疑うことのできないものです。法を聞くというところは、疑うことのできないいわれを聞くことです。ところが世間では「なかなか疑いがはれぬ」とか「信ずるのがむづかしい」とか言っているのですが、それは他力の信と、自力の信とを取り違えているからです。

他力の信とは、それと同じです。自分の力で信ぜずにおこうとしても、信ぜずにはおられぬところを、他力の信とこののであります。「自力を捨てて弥陀をタノム」と教えて下さるが、実はよくよく聞いてみると、自力というものはないので、「自分の力というものをつ造ったか」と尋ねられて、答えのできる人はいないでしょう。つまり自分で作った覚えはないのに、現に力が出るのです。

自力というものは、あるが如くに考えられておりますが、つきつめて行けば、全く根柢はありません。毎日働いていることも、考えていることもすべてが他力によってなされられていくのです。食べる食物も、着る着物も、使う道具も、一切合財が他力のお与えでないものではありません。

なんと易しいことではありませんか。親鸞聖人は御晩年にいたらせられて、他力ということを「自然法爾」という言葉で表現しておられるのであります。

なにか自分の心に疑わぬようにしようとか、堅く信ずるようになりますかかかっているのです。そういう考えで聴聞するならば、おそろく一生涯、

どうして出るのか、自分の所為ではありません。全く他力のお与えというほかはない

したがって、自力を捨てるということも、他力をタノムということも、別にむづかしいことではなく、あたりまえのことを、あたりまえと明らかに知らせてもらうだけであ

大谷派の先哲香樹院は、「仏法千差なりといえども要は自然法爾の四字にきわまる」と決断しておられます。まことに他力の救いは、疑うことのできないいわれであります。

現代真宗問答 12

B 「以前住職さんが、自分の心が問題になり出したのは十四歳の頃で、それは自分より学業が優秀な人に対してねたむ心が起こって、その心がとてもイヤでなんとかしたいと悩まれたというお話を聞きました」

A 「ええ」
B 「ねたみ心は自分と他者と優劣を比較して、自分が劣等であると感じて、優れている他者に対して他者を嫌悪する心ですね」

A 「ええそうです。嫉妬心は自分と他者を比較することから起こってきます。このように他者と比較してわずらう心を仏教語では〈慢〉といっています。自分は人よりも優れているという、いわゆる慢心（優越感）も、逆に人より劣っているという劣等感も、ともに〈慢〉という煩惱です。〈慢〉という煩惱は六大煩惱の一つで、

煩惱の中でも基本的な煩惱です」
B 「比較する〈慢〉という煩惱は根が深いのですね。学業成績を比較し、様々な能力を比較し、頭脳の良し悪しを比較し、性格の善し悪しを比較し、容貌の良し悪しを比較し、財産の多少を比較し、社会的な地位の上下を比較し、学歴を比較し、家柄を比較したりしますね」

煩惱、いわゆる自我愛から起こります」

B 「自我愛が元なのでですね。このように比較して悩む煩惱から何とか解放されたいと思うのですが」

A 「ええ、とても嫌な心ですからね。このことに関して昔、西元宗助先生という厚信の念仏者がおられました。先生の若い頃のお話ですが、先生は京都大学の哲

学科に入られ、当時の偉い学者たち（西田幾多郎や和辻哲郎など）に接し、自分の才質の乏しさに悩まれたそうです。その時に高田保馬先生（著名な社会学者）の歌に安らぎを見出されたということがあります。その高田博士の歌とは、

小さきは
小さきままに
花咲きぬ

A 「ええそうですね。そういう比較煩惱は我執我愛の

野辺の小草の
安けきをみよ

という歌で、これは高田博士が二十歳前後、やはり自分の学問的能力の乏しいことへの劣等感で悩み、一端故郷に帰っていました。或る日、村の野道を歩いてい

る時、小さなスマイレの花を見て、ふっと心に安らぎを覚えて、それで前向きになり、元の大学に帰って研究生活を続けるようになったそうです。その時の歌がこの歌です。この歌について西元先生は、

「いくら私が美しいバラやダリヤの花をうらやんでもしようがない。私はバラやダリヤにはなれない。しかし、バラやダリヤはタンポポやスマイレのマネはできない。スマイレは本当のスマイレになっ

ていき、ダリヤは本当のダリヤになっていけばよい」
と受け取って、それから落ち込まずに前向きに生きられるようになったと仰っています

B 「大きい花もあれば小さい花もある。赤い花もあれば紫の花もあり、黄色い花もある。小さな花は小さいなり、また赤い花は赤いなり黄色い花は黄色いなりに花を咲かせていけばよい、という意味なのです」
A 「ええそうです。誰かの歌詞にあったと思いますが、私という花は世界でただ一つの花で、だれも代わることもできない、と。こういう理解は確かに比較煩惱を和らげる効果があり、いい話だと思います」
B 「そうです」

A 「ただお念仏の世界はもう一つ奥にある事実にてあつていくことであつて、なお大事だと思ひます」
B 「それはどういふことですか」
A 「私もこの比較煩惱で長い間、わずらつてきました。近年はお念仏によつてこの煩惱から解放されていく道があるといひたいです」
B 「お念仏がこの苦しみに応えているといわれるのですか」
A 「ええそうです」

B 「それはどのような道で
すか」

A 「分かりやすく申し上げます
と、大谷派で近年スローガ
ンのようにしてよく言われ
ている三つの言葉を手がか
りにお話しいたしましょう。
そのスローガンとは

一。バラバラで一緒。

一。一つのいのちをみんな
で生きている。

一。今、いのちがあなたを
生きている。

という言葉です。この三つ
の言葉に共通した真理は、
アミダ仏のいのちこそ真実

の自己のいのちなのだとい
うことです。本当の自己は
全てと共通したいのちのほ
かにはなく、人それぞれの
差異とか優劣とかは、共通
したいのちの上の色合い過
ぎないということ。共
通のいのちこそまことの自
己であり、この自己こそ実
在であり、真に大事なもの
であるということ。す」

B 「難しいですね」

A 「たとえば、〈今、いのち
があなたを生きている〉と

いわれる〈いのち〉とは、
量りないいのちであり、こ
のいのちが今此処にはたら
いている。このいのちとは

アミダ仏のいのちであって、
その外に自己はないわけ
です。このいのちが私の主体
であり、私のいのちの主で
す。私という個性を貫い
てはたらいっている量りな
いのちです。ですからそれ
ぞれの個性が違ってバラバ
ラであつても、みな同じア
ミダ仏のいのちに包まれ、
生かされている、それを〈バ
ラバラで一緒〉といわれた
のだと思います」

B 「では一つのいのちを
みんなで生きている」とは」

A 「これも同様です。全て
のいのちを成立させている
量りないいのちを離れて、
誰一人、また何一つ存在す
ることはできません。それ
ぞれのいのちは量りない
のちであるアミダ仏におい
て存在し、生きているので
す。共通のいのちに生かさ
れ、支えられ、包まれ、そ
のいのちを離れては一瞬た
りとも私たちは存在するこ

とはできません」

B 「こういうことと比較煩
悩とはどういう関係がある
のですか」

A 「比較して悩むというこ
とは、自分の個人的な資質
なり能力なりが自分の本質
のように思つてそこに比重
が掛かりすぎているからで
す。いわゆる自分の特殊性
を大きく見過ぎて煩つてい
るのです。この特殊な個性
こそ自分自身だと思つて、
それに深く執着しています。
しかし、それは様々な縁に
よる色合いであつて、私そ
のものとは他と共通ないのち
の外にはありません。しか
も、この共通ないのちこそ
真の実在であり、生と死の
依り処です。全ての人とつ
ながっている有難いいのち
です。

こういう有難いいのちは、
しかしながらほのかにしか
感じられないのが凡夫です。
これをクリアーに感じるな
らそれは聖者でありましょ
う。残念ながら聖者のよう
にはならないのが普通です。
ただほのかながらもこうい

ういのちに触れることは非
常に大きな意味があります」

B 「普通は、〈量りないいの
ちのほかに自己無し〉とい
う認識はほのかでしかなか
な感じられないのですね」

A 「そう思います。少なく
とも私においては。そして
比較煩悩は実は一生なくな
りません。たとえアミダ仏
のいのちのほかに自己は無
いとほのかに知つても、こ
の煩悩は死ぬまで私たちが
煩わします。ですから一生
この煩悩と付き合つていか
ねばなりません」

B 「ではどう付き合つてい
けばいいのでしょうか」

A 「お念仏を聞きつつ付き
合うのです」

B 「お念仏を聞くとは」

A 「劣等感やねたみ心など
の煩悩が起ると、それを
なんとかしようとするので
はなく、そのつどお念仏を
申し、お念仏を聞いていく
のです。ナムアミダブと聞
くということは、私のいの
ちの親であるアミダ仏がこ
こにいる。汝を掴んでいる、
アミダ仏のいのちの外に汝

は無いのだよ」と仰せられ
ているお声です。このお声
をそのつど聞かせていただ
くのです」

B 「お念仏を申し、お念仏
を聞くと、そこにアミダ仏
という私たちのいのちの親
とそのつど出遇つていくと
いうことですね。」

A 「ええそうです。このア
ミダ仏と私の交わりがお念
仏においてなされていき、
だんだんアミダ仏と私の親
子の関係が深まっていくこ
ともなつていくのです。
煩悩を縁としてアミダ仏と
親しくなる関係が深まって
いくのです。有難いことで
す」

B 「煩悩が単なるマイナス
ではなく、真実のいのちへ
の関わりを深めて下さる功
徳になるのですね」

A 「平等ないのちが知らさ
れてくると個人的な能力の
差とか持ち物の差異の価値
は小さくなって、他者と比
べての悩みは当然減つてき
ますし、たとえ差異による
思い煩悩が起つてもそれ
がお念仏の縁となり、アミ
ダ仏との交わりを深める縁

信心夜話

になりますから、そういう煩惱が無駄ではなくなるのです」

B 「煩惱が念仏の助縁となるのですね」

A 「そして、浄土に生まれるとどうなるかと申しますと、『仏説無量寿経』には、浄土のお徳によって私たちの煩惱は浄化され、

〈嫉心を摧滅せり、勝るを忌まざる〉

と説かれています。大変有難いですね。浄土の菩薩は嫉妬心が滅し仏心そのものとなって、勝（すぐ）れたお方に対してそねみねたむ心がまったく無くなると説かれています。こういう希望が与えられるのは有難いです。
(了)

妙好人の言葉

稲葉の妙慰いわく。

「この心はどうしても、ちよつとも、きいてくれぬと云うことの知れるまで聞くのじゃ。」

こんな話をよく聞きます。「真宗の教えを聞いたおかげで、私はこのままでよかった、有難い」とか「アミダ仏は（お前はそのままでもいい）と仰せになっている。私はこのままでよかった、有難い」という話です。

これは信心を表している言葉ともいえますが、ややもすれば大きな間違いになりかねません。

自分の方を見て、お粗末で煩惱だらけの私が「私はこのままでよかった」と喜ぶ。しかしこの喜びは単に自己肯定をして喜んでいるにすぎない場合があります。

実はアミダ仏は（煩惱の深い汝はそのままでもいい）と私たちを肯定しておられるのではありません。まったく逆です。

アミダ仏は（汝は助からぬ身だ。極重の悪人で救い

のない者だ）と絶対否定されるのです。それが第十八願の「唯除五逆誹謗正法」（ただ五逆と正法を誹謗せんをば除く）です。この〈唯除〉は、親鸞聖人が仰せられているように、

「唯除というは、ただのぞくということばなり」（尊号真像銘文）

で、（汝は救いから除かれている助からぬ存在だ）と仰せられているのです。決して（汝のそのままなりではないんだよ）などと仰ってはいません。ただ単純に（ただ除く）と否定されているのです。なぜなら五逆と誹謗正法の罪をもてる存在の私だからです。

〈汝に救い無し〉という絶対の否定を通さずに、（ああ私はこのままでよかった）と喜ぶ教えが真宗ではありません。それは大きな誤解

です。

〈汝に救いなし〉という絶対否定をくぐって、そこに南無阿弥陀仏がどう仰せられているかを聞かせていただくのです。

〈極重悪人よ〉という絶対否定を通して、そこに〈唯称仏〉を聞くのです。〈ただ称えるばかりで助ける〉という絶対の大悲を聞くので、この底抜けの大悲を聞く、そこに「ソノママのお助け」があるのです。この絶対否定を通さずに（私はこのままでよかった）という自己肯定は危険であり誤解です。

このままの私はまことに罪深い存在ではありませんか。どうしてこのままでよいなどと言えまじょうか。それはアミダ仏に抱かれてはじめて言える言葉です。
(了)



【住職雑感】

Youtube で無人

販売所の動画を見た。農家が作った作物を無人販売所で一般より安く売るのが、監視カメラが付いていて、支払いをせずに野菜を持ち去る人を尋問し警察を呼んで調査を取らせるという動画でした。お金を払わずに品物を持って帰るお年寄りが次々と、万引きをしたということで調査を取られている。捕まったお年寄りは普通の人である。中には生活に困っている人もあるだろう。ただ、警察に調べられる泥棒のレッテルを貼られる老人たちを見るとかわいそうだと思う。そして、こういう無人販売所の在り方にも疑問を感じた。誰しも人間は心の中に「損が嫌いで得が好き」という思いがある限り盗み心を潜在的にもっている存在である。その盗み心を引き出すような縁に無人販売所はなりはしないかということである。もちろん万引きは悪であるが、煩惱を引き出す縁にもよっておされて小さな悪を為してしまった人を「犯罪者」としてレッテルを貼っていくような風景を見るのは辛い。誰しも縁がくれば泥棒の一人になりかねないものである。